ながえの里だより

医療法人ながえ会　広報誌（第44号）

発行日　令和6年7月1日
発行責任者　西村美智子

日本医療機能評価機構 認定病院
医療法人ながえ会
庄原同仁病院
庄原同仁病院介護医療院
〒727-0203 庄原市川北町890-1
Tel：0824-72-7300
Fax：0824-72-7333
e-mail：info@nagaekai.com
URL：https://nagaekai.com/

「　神宮寺にて（府中市）　」　撮影者　看護部　山吉広尚

６月１８日、府中市にある神宮寺に行ってきました。順路通りにまわっていくと、いろんな色のアジサイが咲いていました。幼児から高齢者まで、幅広い年齢層の方々が来られていました。ぜひ、行ってみてください。

基本理念

わたくしたちは、すべての人に等しく
仁愛の精神をもって接し、
心の通う医療の実践に努めます。

基本方針

患者様の満足：常に患者様の立場に立って行動します。
職員の満足：働きやすく、やりがいのある職場づくりに努めます。
地域の満足：医療サービスを通じて地域の方々に喜ばれるよう努めます。

響きあうこと

医療法人ながえ会　理事長　村尾文規

ある朝のことである、小ホールから流れてくる童謡に深い感動を覚え、涙があふれそうになった。エレクトーンの奏でる聞きなれたこの童謡がなぜ、そうさせたのか不思議に思った。いつしか、心のなかで、この理由を反芻していた。

音楽のルーツに関わる発見として、３万５千年前の地層から笛らしきものが出土したという記録がある。旧石器時代にそのルーツがあるとすると、音楽は、人の生活や文化と深く関わっていることになる。生きていくうえで切り離すことのできない、飲食と同様に、音楽は、脳の報酬系を活発にし、脳に快楽を与えるという。音による神経回路がすでにあるということになる。

個人的な体験であるが、母親の胸に抱かれた赤ちゃんは、子守唄を唄う母親の口元を見ながら、うっとりとしているさまを何度も見たことがある。生を営むなかで複数の音源から発せられる音を母親の胸壁越しに聞いている。鼓動、呼吸音、蠕動音は、時に重なり、融合し、和合し、振動し、種々の形式に組みかえられ音楽となる。さながら、楽器として機能しているはずである。赤ちゃんは母なる楽器が奏でる音楽と口元から漏れてくる子守歌を、視覚や聴覚を動員して聴いて心の安らぎを得ているのであろう。親子間で、大切なコミュニケーションを交わしているのである。コミュニケーションとは、感情や思考を言葉、文字や聴覚を媒体として伝達することである。音楽評論家の遠山一行氏は音楽とは音による会話だという。母親は子供に対して音楽療法を施していることになる。音楽なしに生をとらえることはできない（ニーチェ）音楽と関わらずに生きることはできないということだ。

あの日、アーチストが奏でるエレクトーンの調べが、私の琴線に触れた。彼女の童謡の解釈、作曲家の思いをエレクトーンの鍵盤に触れる、圧する、叩くなど加える力の強弱、時間などで、感情は音刺激になって聴覚神経に伝達される。やがて、脳内の1千億個の神経細胞は、膜電位を利用して、神経伝達物質のやり取りに変換される。この活動によって感情が生まれるらしい、神経細胞が活動しているときはシンホニー（響きあうと言う意味がある）を奏でていると言う（脳科学者茂木健一郎）。養老孟司先生の著書に、聴覚細胞は、均等に配列され、ピアノの鍵盤の配列と似ていると記してあったことを思い出した。音刺激に変換された感情は、まず、聴覚細胞に、鍵盤を打つようにして伝達されているに違いない。聴覚は瞑想とつながる傾向があるというから、遠い昔の原風景を想起させたのかもしれない。アーチストの感情と限りなく近い感情が私の脳内に立ち上がったからであろう。音楽療法とは、響きあうことにほかならない。

今春、偶然の出会いで素敵なアーチストに巡り合えた。優秀な音楽療法士でもある。新型コロナのトラウマから脱け出せないままの当院で異才を放っている。この偶然の出会いを幸運に結び付けるには（セレンデピテイー）、意外なことに出会ったときに、素直に受け入れることだ。音楽は言葉より雄弁に感情を伝えてくれる。心と心が響きあう職場に変える『何か』を受け入れたいものである。

さて、筆者にその器量があるか。言葉に詰まってしまった。

～　着任のご挨拶　～

令和6年4月より、児玉　節（こだま　たかし）医師が着任いたしました。

2024年４月末に赴任しました。1999年に広島大学第一外科を退職し、父の後を継ぎ、庄原市川北町で開業してきました。今年息子が後を継いでくれたので、以前より約束していた庄原同仁病院に着任しました。人口減少の中、地域の医療を守るのは大変なことです。維持経営をすることは難しい時代になっています。ここで働く人々が誇りを保つことができ、患者さんに喜んでいただける環境を保ち続けなければいけないからです。こうした中で、職員の皆さんが、患者さんにやさしく、丁寧に接しておられることに感銘を受けています。開業医を続けながら世話になった地域のためにと思い、「庄原こどもミュージカル」、庄原民謡「敦盛さん」保存会、芸備線にカープ号を走らせる会などの立ち上げ、継続に携わってきました。これもすべて郷土庄原を誇りに思える人が育ってほしいと願うことからでたことです。庄原格致高校時代ラグビー部で汗を流しました。最初の試合では、2分に1回トライされ、広島の奴らにはかなわんと強烈な劣等感を抱きましたが、練習に練習を重ね、最後には県大会で優勝するまでに成長しました。これが原体験になり、自分が成長したと自覚しています。最初はみじめでも、みんなで努力すれば何かが達成できる。

さて、この病院で私に何ができるのか、医師の立場ですので、診療はもちろんのことですが、現場をみますと、今の地域を育て、いつくしんで来られた人が静かに過ごしておられるように見受けられます。尊厳を保ち、少しでも自分らしく、快適な療養生活が送れる手助けをしたいと考えているところです。

今年も「庄原こどもミュージカル」第24回「ふしぎの国のアリス」を、10月27日に庄原市民会館で公演します。こどもたちはセリフや歌や踊りに全身全霊を傾け練習の成果を出していきます。その舞台は感動に包まれ、こどもたちの力を再認識させてくれます。こどもたちは輝き、努力すればかくも美しくなるのだと。ぜひ会場に足をお運びください。庄原民謡「敦盛さん」保存会は、河面絹子氏が亡くなられ13年間休止していました。お願いして楽笑座のオープニング公演に花柳社中に演じていただきました。それは、それは優美で、雅なものでした。これが庄原で伝承されている、是非とも後世に伝えたいと考え、保存会を再結成したものです。踊り・歌・笛・三味線・琴・尺八・鼓、太鼓からなっています。継承の一人とならんと思われる方は是非とも参加ください、毎月1、3土曜日練習しています。

NewFace

新入職員紹介

柄松　美津子　　看護師　　医療病棟　令和6年4月入職

「新しい環境で慣れないことも多いですが、皆さんに優しく教えて頂きながら日々頑張っています。どうぞよろしくお願い致します」

森田　涼花　　調理員　　栄養課　令和6年4月入職

「4月から調理員として勤務させて頂いています。まだまだ慣れないことばかりですが、少しでも早く患者さまに安心して頂ける調理員になれるよう頑張ります」

徳長　唯　　介護福祉士　　介護医療院　令和6年4月入職

「一生懸命がんばりますのでご指導よろしくお願いします」

山平　純子　　介護職員（レク担当）　　医療病棟　令和6年4月入職

「5月よりレクリエーション担当をさせていただいております山平です。元気と笑顔、優しさとあたたかな心を大切に、『行きたくなる場』を作っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします」

廣瀬　やよい　　介護職員　　医療病棟　令和6年5月入職

「同仁病院で介護の仕事を始めて一か月が過ぎました。ようやく仕事の流れの中で、理解できるようになりました。入院されている方々に寄り添った正しい接し方を早く習得し、頑張って働きたいと思います」

太谷　美枝　　准看護師　　介護医療院　令和6年5月入職

「お昼までの勤務ですが、頑張りますのでよろしくお願いします」

Focus

笑顔広がれ♪音楽療法♪

4月より、週1回の音楽活動をさせて頂いています。午後2時30分になると、となり組の歌で始まり、北島三郎のまつりの曲と、太鼓の音が響きます。

音楽療法　担当
看護師　佐倉　直美

音楽に合わせたリズム体操や、季節を認識する歌、懐かしい昭和歌謡などを歌ったり、歌本からのリクエスト曲も歌って頂いています。キーボード、ウクレレ、ココペリやコカリナの珍しい楽器演奏も行っています。始めたばかりの頃に比べ、表情も豊かになられ、笑顔や言葉が増えて来ています。歌声も大きくなってきました。また、歌にまつわる思い出話もされるようになりました。

さて、音楽療法とはなんでしょうか？

音楽の持つ力を利用して、心身の健康を回復、改善出来るよう援助するものとありますが、私は、聴いてここちよく、心にじーんとくると思った時から効果は生まれていると思っています。

音楽は数千年も前から、人が生きて行くための、貴重な役割を担って来たと言えます。“ことばのいらない、コミュニケーション”です。音楽は、心だけでなく、身体にも反応します。血圧や脈拍が安定したり、体温も変化します。腫瘍細胞やウイルスをやっつけるNK細胞も増えることがわかっています。

実施するにあたり、大切にしている事は、

1．自分が楽しんで行うこと。
2．利用者のペースに合わせること。
3．決して強制せず、途中で眠られても、帰られても、とがめないこと。
4．その方のやり方を、尊重すること。
5．人生の経験者である事を心にとめ、常に尊敬の気持ちで接すること。

アイコンタクトをとりながら、何に喜びを感じておられるかを考え、自分も元気を頂いている事に感謝して、この活動を続けて行きたいと思います。

編集後記

4月21日、世界的に著名なピアニストであるフジコ・ヘミング女史が亡くなりました。享年92歳でした。彼女の演奏は、彼女自身の波乱に満ちた人生経験と感情が強く反映されていました。その演奏スタイルは技術的な精巧さに欠けるとの意見もありましたが、その表現力と感情の深さは多くの聴衆の心を打ち、魂のピアニストと称されました。

その4月、当院では金曜日になると、レクリエーション室からキーボードの演奏に合わせた歌声が院内に響き渡るようになりました。その抑揚のある音色に心が揺さぶられ、自然とリズムを刻みます。部屋を見渡すと、病室では見ることのできない患者さまの表情や動きが目に飛び込んできます。その空間で奏でられる音や口ずさむ詩が、患者さまの心や感情に深く響いているからだと思います。その空間にいると、音楽の力を活用した音楽療法の効果を、私自身も体感することができました。

フジコ・ヘミング女史は、90歳を超えても演奏活動を続け、その生涯を通じて現役でした。私たち職員一人ひとりのケアに込めた魂が、患者さまの生涯現役の一助となることを心から願っています。

地域連携室　社会福祉士　山野友和